

「生きもの」として「生きる」

「ドキュメンタリー映画（藤原道夫監督作品）
「水と風と生きもの」と——中村桂子・生命誌を紡ぐ——」

福島第一原発の事故は、すべての生きものや自然環境に甚大な被害を与えた。それを経験してもなお、原発を持ち続けようとする。戦争を経験し、唯一の被爆国であるにもかかわらず、どういふかたちであれ、人間同士が殺し合う戦争に参加できるような国になろうとしている。



学校での農業科の授業が開講されている。子どもたちは生き生きとした眼で農作物を収穫し、笑顔でそれを口に運ぶ。地元の農家の方から指導を受けて、自分たちで種を撒き、水をやり育て、収穫をするという体験から自然と向き合うことの大切さを感じ、社会の中で生きものとの繋がりを実感する。これも、生命誌のひとつの表現であり、中村館長はそれを実際に現場に赴き実践している。

異分野の方々との対談も中村館長が積極的にに行っている活動のひとつ。建築家の伊東豊雄氏、3・11絵本プロジェクトいわての末盛千枝子氏、風の彫刻家の新宮晋氏、民俗学者の赤坂憲雄氏、探検家の関野吉晴氏と、活動の場はそれぞれ異なるが、フィールドを超えて、生命誌に通じる共通のメッセージを対話の中から紡ぎ出している。自然と向き合いながら生きること大切を考える人々と交わす言葉は生命誌に新たな風を吹き込む役割を果たしている。

この現代社会を経済、文明側からではなく、生命、生きもの側から見ることによって、問題を解決する糸口が見えてくるのではないだろうか。

人間が「生きもの」として「生きる」とは、どういうことか。生命誌のドキュメンタリー映画「水と風と生きもの」と——中村桂子・生命誌を紡ぐ——は、生命学者、中村桂子氏が館長を務めるJT生命誌研究館を通していま私たちは何を「紡ぐ」必要があるのかを問いかける。生命誌は人間も含めて、さまざまな生きものたちの「生きていく」様子を見つめ、そこから「どう生きるか」を探す新しい知であり、それを表現として観て、触れて、考えることができているのが、JT生命誌研究館。「研究所」ではなく「研究館」である意味は、研究とその成果を表



生命誌という知を通して、改めて考えてみたい。人間が「生きもの」として「生きる」ということはどういうことなのか。「ほんとうの賢さ」と「ほんとうの幸せ」とは何なのか。そして、私たちが進むべき未来はどこにあるのか。

「人間は生きものであり自然の中にある」という当たり前のことを忘れないための映画が完成した。

●上映時間 一一九分
●上映予定 「東京」九月 ポレポレ東中野 / 「大阪」第七藝術劇場（予定）
●問い合わせ JT生命誌研究館 / ☎〇七二六八一—九七五〇（代）

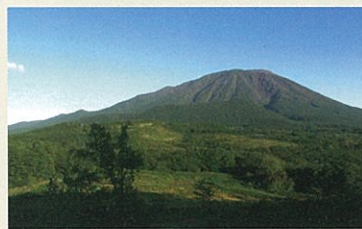


現する場こそ必要であると考えられているからだ。

「3・11」以降、宮沢賢治を読み直した中村館長は「ゼロ弾きのゴーシュ」を生命誌の視点から読み解き、人形劇として舞台化し、昨年、JT生命誌研究館の二十周年の節目に上演した。制作にあたっては中村館長自ら、実際に賢治の故郷である盛岡、花巻を訪れ、賢治が見たであろう風景を見つめ、風を感じて始めた。現場の指揮を執り、そして、語り役として出演もしている。映像はその制作、稽古の様子から上演までの過程を追う。ゴーシュは、自宅の水車小屋に

戻ると必ず水を飲む。この水を飲むという行為が、近代の乾いた文明社会から、湿りのある自然の世界に入っていく重要な儀式であり、それが「生きもの」として「生きる」姿であることを表現している。「生きもの」にとつての「水」とは何かを考えさせながら、私たちにとつての、「ほんとうの賢さ」と「ほんとうの幸せ」というテーマに迫っていく。

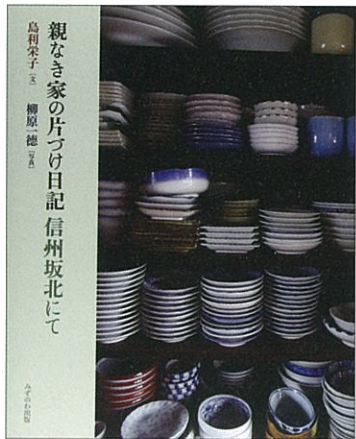
「コンピュータで株を学ぶより畑でカブを育てるほうが大事だ」と中村館長が小学校の教育の在り方に警鐘を鳴らしたことがきっかけとなり、福島県喜多方市では教育特区という形で小



親は何を遺していくのか
『親なき家の片づけ日記 信州坂北にて』
島利栄子・著 / 柳原一徳・写真
みずのわ出版 四二〇〇円十税

「いい本は答えを教えない」と言った人がいる。自分が本とどう向き合ったか、その本から何が自分に投げかけられたか、その本によって自分の人生をどのように変えることができたか、そのような意味であろう。タイトル通りの、親が亡くなった実家に帰った娘が遺品整理や片付けをしながら書いた日記である。ところが、いわゆる

「終い」が舞台であるにもかかわらず、「〇〇さんが来てくれた」「〇〇をこ馳走になった」「耕作放棄地が……」と、一見、親とは何の関係もなさそうな話が少なくない。「この味は母が」的な回想もあるにはあるけれど、家族とは、ふるさととは、繋がりととは、といった御託は何もない。写真にしても、長年この家で使われていた茶碗などは申し訳程度で、どう見ても、田んぼや近所の子どもたちや知人親子の顔が大写した。だが、ふと思う。両親はそれを遺したのかもしれない、と。「終い」の先に「始まり」を用意するのが親なのか、とも。答えは遺された者が見つけるものだ。



親なき家の片づけ日記 信州坂北にて
島利栄子・著 柳原一徳・写真